

4歳児のごっこ遊びにみる社会的スキルの様相

林 千 恵*・吉 澤 千 夏**

(令和6年1月19日受付；令和6年4月18日受理)

要 旨

本研究は、幼児の社会的スキルの様相をごっこ遊びの観察を通して明らかにすることを目的とし、19名の年中児を対象に自由遊び場面におけるごっこ遊びの様子を観察し、その中で表出される社会的スキルについて分析を行った。分析の結果から、以下の点が明らかとなった。

(1) 観察されたすべての回において「主張スキル」と「協調スキル」の出現回数が多く、「自己統制スキル」の出現回数は少なかった。

(2) 各社会的スキルの出現割合は「主張スキル」が最も多く、次に「協調スキル」が多く表出されていた。一方、最も表出が少ないのは「自己統制スキル」であった。また、観察回の前半では、「主張スキル」と「協調スキル」の出現割合にあまり差がないものの、後半になると、「主張スキル」の出現割合が「協調スキル」の出現割合より多くなった。

(3) 社会的スキルの下位カテゴリーでは、「自分の考え・思いの主張を表す発話・行為」「友達の主張・提案を受け入れる発話・行為」「友達の主張・提案を受け入れ、ごっこ遊びのルールに従って遊ぶ発話・行為」の表出が多くみられた。

(4) 観察前半 (term1) では「自分の考え・思いの主張を表す発話・行為」「友達の主張・提案を受け入れ発話・行為」「仲間とのいざこざ場面で自分の考えに折り合いをつけ、気持ちをコントロールできる」の表出が多い観察回がある一方で、観察後半 (term2) では「相手の主張は聞こえているが、嫌だ、やりたくないという気持ちを『無視』することで表現するスキル」「友達の主張・提案を受け入れ、ごっこ遊びのルールに従って遊ぶ発話・行為」の表出が多い回がみられた。発達に伴い、ごっこ遊びに表出される社会的スキルはシンプルなものから複雑かつ巧みなものへと変化することが示唆された。

KEY WORDS

4-year-old children 4歳児, pretend play ごっこ遊び, social skill 社会的スキル

1. 緒言

近年、日常生活の様々な場面において、大人のみならず子どもも他者との関わり方に悩んでいることがメディアで取り上げられており、その解消の一助として社会的スキルの獲得の重要性が指摘されて久しい。社会的スキルとは、「人間関係の形成・維持を円滑に行うための、身に付けることのできる技能」⁽¹⁾、「他者との関係を円滑に進めるための技能」⁽²⁾であり、人間関係を円滑に行うために重要な能力であるといえる。また社会的スキルは a) 個人間相互行動、b) 自己関与行動、c) 学習関連スキル、d) 主張、e) 仲間の受容、f) コミュニケーション・スキルを包括するもの⁽³⁾であり、対人場面において、他者と上手く関わるために必要な様々な能力を包括しているものであるといえる。

幼児の社会的スキルに関する研究では、遊び能力と社会的スキルに関連があり、遊び能力が高くなると社会的スキルも高くなるという因果関係が認められ、遊び能力を高めることで社会的スキルが向上することから、遊びは社会的スキル習得のために重要な役割を持つことが示唆されている⁽⁴⁾。また、「遊び能力」の形成過程には「社会的スキル」が関わっていること、さらに「社会的スキル」の形成過程には、「遊び」「遊び仲間」「遊び空間」が関わっていることが明らかにされており、社会的スキルの発達と遊びの発達には相互関係があると考えられる⁽⁵⁾。

社会的スキルの発達はルールを守りつつ人との交わりを築くという点において、幼児期の「ごっこ遊び」と学童期の「競争の遊び」の有効性が指摘されている⁽⁶⁾。「ごっこ遊び」はそれに参加するメンバー間でイメージを共有し、「ごっこ遊び」の枠組みやルールの中で関わり合い、展開しており、幼児期の社会的スキルの発達を捉えるために有効な遊びであると考えられる。そもそも「ごっこ遊び」とは、複数の子どもが参加し、共同で遊びのイメージを共有しながら作り上げていく虚構遊びであり⁽⁷⁾、これまでも様々な人間の発達と関連づけて研究されている。また、

「ごっこ遊び」参加者が自分の引き受けた役割に適合する役割行為を演じることで、その「ごっこ遊び」は成立することから、それぞれの役割には役割に付随する行為の暗黙のルールが存在する⁽⁸⁾といえる。このことから、「ごっこ遊び」においてルールを守りながら遊ぶということは、遊びを継続させるために重要なものであり、幼児たちは役割や設定というルールを守りながら自分の意見を主張したり、相手の意見に協調したりして、「ごっこ遊び」を展開させているといえる。また、ルールの中で遊ぶことは、他者と意見の相違があった場合に、自分の気持ちに折り合いをつけて遊ばなければならないこともあるであろう。以上のことから、「ごっこ遊び」を展開させる上で、自分の気持ちをしっかりと主張することや、相手の思いを受け入れて協調すること、また自分と相手の気持ちが異なるときにどのように折り合いをつけるのかといった様々な力が必要になると考えられる。

これまで、社会的スキルと「ごっこ遊び」の関連については、集団で「ごっこ遊び」を展開することにより、言語的なコミュニケーションや相手の気持ちを理解する能力などの様々な社会的スキルが習得されること⁽⁹⁾、「ごっこ遊び」を通して、社会生活を送る上で必要な話し方を習得するだけではなく、相手の気持ちを読み取ったり、自分の気持ちを伝えたりするようになることが明らかにされている⁽¹⁰⁾。以上の点からも、社会的スキルの発達と「ごっこ遊び」には密接な関連があり、幼児は「ごっこ遊び」を通して社会的スキルと発達させるとともに、社会的スキルが幼児の「ごっこ遊び」をより豊かにしていると考えられる。

幼児の中でも4歳児は、自己主張をしたり、相手の気持ちを受け入れたりする経験を積み重ねていく中で、他者と協調して生活をする大切さを学び始める時期であり、社会的スキルの獲得に重要な時期であることが推察される⁽¹¹⁾。様々な幼児の社会的スキルの獲得状況の変化がみられる時期である4歳児の「ごっこ遊び」における社会的スキルの様相を捉えることは、幼児の社会的スキルの獲得とその変容を理解するために重要な意味を持つといえる。

そこで本研究は、4歳児のごっこ遊びの観察を通して、幼児が表出する社会的スキルの特徴とその変化を捉えることを目的とする。

2. 方法

2.1 調査対象

研究対象者は、N県J市内のJ幼稚園の年中児男児8名、女児11名の計19名である。幼稚園での朝の自由遊び場面のうち、ごっこ遊びが行われている場面を研究対象とする。

2.2 調査時期

観察期間は平成30年6～7月の10日間及び平成30年10～11月10日間の計20日間である。観察にあたっては、対象児の遊びの流れや連続性、変化等を考慮し、できるだけすべての曜日を含む連続した期間で行うこととする。2回の観察期間のうち、それぞれ前半の5日間は予備観察とし、後半の5日間を本観察とする。観察時間は、対象児のほぼ全員が登園し、遊びが開始される午前9時30分から自由遊び終了時刻までとする。

表1 幼児用社会的スキル尺度

A. 主張スキル	B. 協調スキル	C. 自己統制スキル
<ul style="list-style-type: none"> ・友だちをいろいろな活動に誘うことができる ・自分から仲間との会話をしかけることができる ・簡単に友だちをつくることができる ・指示しなくても、遊びや活動の集団に加わることができる ・不公平な扱いを受けたと感じたら、教師にそのことをうまく話すことができる ・非公平なルールには適切なやり方で疑問を唱えることができる ・ゲームや集団活動に参加することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームなどの活動中に、自分の順番を待つことができる ・保育者の指示に従うことができる ・園での活動をきちんと行うことができる ・人とゲームをしている時に、ルールに従うことができる ・園にある道具や教材を片付けることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間から嫌なことを言われても、適切に対応できる ・批判されても、気分を害さないで気持ちよくそれを受けられることができる ・仲間と対立した時には、自分の考えを変えて折り合いをつけることができる ・仲間とのいざこざ場面で、自分の気持ちをコントロールできる

2. 3 調査の内容及び方法

本研究は、自由遊び場面における「ごっこ遊び」場面の分析を通して、幼児が表出する社会的スキルの特徴とその変化を捉えることを目的としている。そこで、「幼児用社会的スキル尺度⁽¹²⁾」(表1)を基に、社会的スキルが高い幼児及びこれから社会的スキルを伸ばしてほしい幼児について担任保育者に尋ね、対象児の社会的スキルの獲得状況を把握する。これらを踏まえ、対象児のうち特に社会的スキルが高く、「ごっこ遊び」をよく行う男児(T)1名・女児(R)1名の計2名を観察におけるターゲットとする。予備観察において、観察のターゲットとなる男児Tと女児Rを含む遊びを観察したところ、男児Tと女児Rが異なるグループで遊んでいる様子がみられたことから、ターゲットである男児Tと女児Rを含む2つのグループの遊び場面をそれぞれ観察することとする。対象児の遊び場면을詳細に分析するために、男児T、女児Rと他児が「ごっこ遊び」を行う場面についてビデオによる録画を行い、分析に用いる。

撮影にあたっては、ターゲットの男児T及び女児Rを含むそれぞれのグループについて、観察時間を最大で30分とし、「ごっこ遊び」場面を含む遊び場面の観察を行う。これは、対象児の在籍する園の午前中の自由遊び時間が、幼児の登園後およそ1時間程度であること、そして対象児への負担を極力最小限に抑えるための配慮である。観察時、15分以上撮影を続けても、対象児の「ごっこ遊び」がみられない場合は、そこで観察を中止し、もう一方のグループの観察を行うこととする。また、観察している30分以内に「ごっこ遊び」から違う遊びに変わり、その後ごっこ遊びに戻らないと判断された場合も、その時点でビデオ撮影を打ち切ることとする。

表2 社会的スキルの下位カテゴリー

		分類基準			分類基準
A. 主張スキル	ごっこ遊びの提案 (A10)	ごっこ遊びの枠組みの中で役割・場面・設定などを提案するスキル。	B. 協調スキル	友達の主張・提案を受け入れる発話・行為 (B10)	相手の主張を受け入れ、それに合わせたやりとりをする。 例：「～しよう」 →「いいよ」「うん」 「それ取ってきて」 →持ってくる 「あっち行こう」 →ついていく (相手の真似をする)
		(i)ごっこ遊びの中で役割になりきりながら提案する発話・行為 (A11) 例：今からパーティーが始まるよ 授業を始めます			
		(ii)ごっこ遊びの外側から提案する発話・行為 メタコミュニケーション (A12) 例：ここ学校ね！ ここはキッチンだよ		友達の主張・提案を受け入れ、ごっこ遊びのルールに従って遊ぶ発話・行為 (B20)	ごっこ遊びの枠組みで、提案を受け入れた上でごっこ遊びに入って遊ぶことができるスキル。主張に見えるが、ごっこ遊びのストーリー上、必然性のある主張。 例：「おれ先生！」 →「わたし生徒！」 「わたしご飯作る」 →「じゃあ私手伝う」
	友達を遊びに誘うような発話・行為 (A20)	ごっこ遊びを含める遊びに自分から誘うことができるスキル 例：～しよう！ 突然逃げることで、鬼ごっこの開始と同時に鬼ごっこの役割を相手に伝えるような行為			
自分の考え・思いの主張を表す発話・行為 (A30)	自分の考え・思いを表出することができるスキル 例：～したい！、～だ！ 借りてもいい？、～してもいい？、嫌がる等	C. 自己統制スキル	自分と相手のイメージが違った時、相手の主張を受け入れる。(C10)		
反応なし(無視) (A40)	相手の主張は聞こえているが、嫌だ、やりたくないという気持ちを「無視」することで表現するスキル		嫌なことを言われても適切に対応できる。(C20)		
				仲間とのいざこざ場面で自分の考えに折り合いをつけ、気持ちをコントロールできる。(C30)	

2. 4 分析方法

原則として、本観察である計10日間を分析に用いる。ただし、対象となった5日間のうち、「ごっこ遊び」がみられない日がある場合は、予備観察の中から本観察に近い日程から対象とする日を選ぶこととする。また、分析に用い

る計10回の観察回のうち、前半5回（6～7月）の観察期間をterm1とし、後半5回（10～11月）の観察期間をterm2とする。

ビデオで撮影した映像を基に、遊びの中で表出された幼児の発話・行為のトランスクリプトを作成する。それらを用いて、発話・行為を表1に示した社会的スキル尺度（「主張スキル」「協調スキル」「自己統制スキル」）に分類する。さらに、これらのスキルと「ごっこ遊び」との関連をより詳細に捉えるために、観察された幼児の社会的スキルについて、主張スキルには5つの下位カテゴリー、協調スキルには2つの下位カテゴリー、自己統制スキルには3つの下位カテゴリーを設定し、幼児の発話・行為をさらに分類し、分析を行う（表2）。

3. 結果及び考察

3.1 観察時間と社会的スキルの出現回数

まず、10日間の遊びの観察時間と各スキルの出現回数について概観する。男児Tと女児Rを含む2グループそれぞれについて、各観察回の観察時間及び各回の社会的スキルの出現回数を示す。表3は、男児Tを含むグループ、表4は、女児Rを含むグループの遊びの観察時間と各スキルの出現回数を示したものである。

表3をみると、観察回10回のうち8回において1800秒遊び場をを観察し、2回の観察では1800秒に達していない。最も観察時間が短かったのは9回目の895秒である。また、遊びに参加している幼児は延べ54名であり、1回あたりの平均人数は約5.4名である。各社会的スキルの出現回数をみると、すべての観察回で「A主張スキル」と「B協調スキル」の出現回数が多いのに比して「C自己統制スキル」の出現回数は少ない。

表4をみると、観察回10回のうち3回において1800秒遊び場をを観察し、7回の観察では1800秒に達していない。最も観察時間が短かったのは9回目の616秒である。また、遊びに参加している

幼児は延べ49名であり、1回あたり平均人数は約4.9名である。観察回10回においてA～Cの社会的スキルの出現回数についてみると、すべての観察回で「A主張スキル」と「B協調スキル」の出現回数が多いのに比べ、「C自己統制スキル」の出現回数は少ない。

3.2.1 男児Tを含むグループの各観察回における各スキルの出現割合

次に、男児Tを含むグループの各観察回における各社会的スキルの出現割合について概観する。

観察回毎に各社会的スキルの出現割合をみると（表3）、いずれの回においても「A主張スキル」が最も多く表出され、次いで「B協調スキル」が多い。一方、最も表出が少ないのは「C自己統制スキル」である。

次に、term1とterm2で分けて「A主張スキル」と「B協調スキル」のスキル出現割合についてみると、term1で

表3 観察時間と社会的スキルの合計出現回数（男児Tを含むグループ） n (%)

観察回	観察時間 (秒)	人数	A.主張スキル (回)	B.協調スキル (回)	C.自己統制スキル (回)	合計回数	
term1	1	1800	5	140 (50.0)	132 (47.1)	8 (2.9)	280 (100.0)
	2	1800	6	208 (53.2)	171 (43.7)	12 (3.1)	391 (100.0)
	3	1800	5	196 (51.2)	179 (46.7)	8 (2.1)	383 (100.0)
	4	1800	6	114 (69.9)	43 (26.4)	6 (3.7)	163 (100.0)
	5	1800	5	57 (49.6)	51 (44.3)	7 (6.1)	115 (100.0)
term2	6	1800	5	99 (57.2)	68 (39.3)	6 (3.5)	173 (100.0)
	7	1800	5	81 (65.3)	37 (29.8)	6 (4.9)	124 (100.0)
	8	1375	7	129 (52.4)	103 (41.9)	14 (5.7)	246 (100.0)
	9	895	6	42 (73.7)	14 (24.6)	1 (1.8)	57 (100.0)
	10	1800	4	58 (47.5)	56 (45.9)	8 (6.6)	122 (100.0)
計	16670	54	1051 (51.2)	854 (41.6)	76 (3.7)	2054 (100.0)	

表4 観察時間と社会的スキルの合計出現回数（女児Rを含むグループ） n (%)

観察回	観察時間 (秒)	人数	A.主張スキル (回)	B.協調スキル (回)	C.自己統制スキル (回)	合計回数	
term1	1	1800	5	43 (44.3)	51 (52.6)	3 (3.1)	97 (100.0)
	2	1355	8	112 (53.3)	89 (42.4)	9 (4.3)	210 (100.0)
	3	1800	5	49 (57.6)	31 (36.5)	5 (5.9)	85 (100.0)
	4	645	5	71 (54.2)	58 (44.3)	2 (1.5)	131 (100.0)
	5	1160	4	66 (50.8)	62 (47.7)	2 (1.5)	130 (100.0)
term2	6	1800	4	207 (67.2)	90 (29.2)	11 (3.6)	308 (100.0)
	7	1344	3	53 (48.6)	56 (51.4)	0 (0.0)	109 (100.0)
	8	804	6	56 (58.9)	36 (37.9)	3 (3.2)	95 (100.0)
	9	616	5	33 (63.5)	18 (34.6)	1 (1.9)	52 (100.0)
	10	1550	4	82 (65.6)	41 (32.8)	2 (1.6)	125 (100.0)
計	12874	49	772 (57.5)	532 (39.6)	38 (2.8)	1342 (100.0)	

は4回目の観察を除いた4回の観察回（1・2・3・5回目）において、「A主張スキル」の出現割合が50%前後であり、「B協調スキル」の出現割合は45%前後である。4回目においてのみ「A主張スキル」が多く表出されたのは、この日、男児Tを含むグループ内で1つの「ごっこ遊び」が成立せず、幼児が各々ごっこ遊びやふり行為を楽しんでいたことが理由であると考えられる。一方term2では、観察回によって出現するスキルの割合にばらつきがみられる。例えば「A主張スキル」の出現割合は50%弱から70%強、「B協調スキル」の出現頻度は25%弱から45%強である。6回から9回目の4回の観察においては、「A主張スキル」が「B協調スキル」よりも10%~50%程度出現割合が高い。10回目のみ「A主張スキル」「B協調スキル」の出現割合がほぼ同程度であるのは、男児Tによる「A主張スキル」の表出が多く、遊びを展開させる発話のほとんどが男児Tのものであったことによるものと考えられる。それに対して他児は「B協調スキル」の表出を多用したことから、全体的にみると「A主張スキル」「B協調スキル」の出現割合が同程度表出する状況になったと推察される。

このことから、男児Tを含むグループの「ごっこ遊び」は、「A主張スキル」「B協調スキル」を高い割合で表出して遊びを展開していることが明らかとなる。また、すべての観察回において「A主張スキル」「B協調スキル」を多用しながら遊びが展開されており、これらは「ごっこ遊び」を継続する上で重要なスキルであると考えられる。さらに男児Tを含むグループの社会的スキルの出現割合をterm毎にみると、各termで社会的スキルの表出に違いがみられる。term1では「A主張スキル」「B協調スキル」の出現割合にあまり差がない日が多く、term2では「A主張スキル」の方が「B協調スキル」よりも出現割合が多い。発達に伴い、互いに思いを表出しながら遊ぶ様子がうかがえる。

3. 2. 2 女児Rを含むグループの各観察回における各スキルの出現割合

さらに、女児Rを含むグループの各観察回における各社会的スキルの出現割合について概観する。

観察回毎に各社会的スキルの出現割合をみると（表4）、1回目と7回目を除く8回の観察回において「A主張スキル」が最も多く表出され、次いで「B協調スキル」が多い。一方、最も表出が少ないのは「C自己統制スキル」である。

次に、term1とterm2で分けて「A主張スキル」と「B協調スキル」のスキル出現割合についてみると、term1では3回目の観察を除いた4回の観察回（1・2・4・5回目）において、「A主張スキル」の出現割合が50%前後であり、「B協調スキル」の出現割合は45%前後である。3回目においてのみ「A主張スキル」が多く表出され、「B協調スキル」の表出が少なかったのは、男児Tを含むグループ同様、女児Rを含むグループにおいても、1つの「ごっこ遊び」が成立せず、各々の思い・考えの主張が多くなり、周りの友達に協調をすることが少ない遊びが展開されたためと考えられる。一方term2では、7回目を除く4回の観察回（6・8・9・10回目）において、「A主張スキル」の方が「B協調スキル」よりも20%~40%ほど出現割合が高い。7回目の観察回のみ「A主張スキル」「B協調スキル」の出現割合が同程度みられたのは、女児Rが主に中心になって遊びを展開し、それに対して他児は「B協調スキル」で対応したこと、他の観察回と異なるスキルの出現割合がみられたと考えられる。

このことから、女児Rを含むグループの「ごっこ遊び」においても、「A主張スキル」「B協調スキル」を高い割合で表出して遊びを展開していることが明らかとなる。また、すべての観察回において「A主張スキル」「B協調スキル」を多用しながら遊びが展開されており、これらは「ごっこ遊び」を継続する上で重要なスキルであると考えられる。さらに女児Rを含むグループの社会的スキルの出現割合をterm毎にみると、各termで社会的スキルの表出に違いがみられる。term1では、「A主張スキル」「B協調スキル」の出現割合にあまり差がみられないものの、term2では、「A主張スキル」の方が「B協調スキル」よりも出現割合が多い。女児のグループにおいても、発達に伴い、各自が思いを表出しながら遊んでいる様子がうかがえる。

3. 3 社会的スキルの下位カテゴリーにおける各スキル出現回数

表出される社会的スキルの特徴をより詳細に捉えるために、社会的スキルをさらに10項目の下位カテゴリーに分類し（表2）、各スキルの出現回数について分析する。分析にあたっては、対象となる10回の観察時間が異なるため、ターゲット児を含む遊びグループの各幼児の表出したスキルについて1時間あたりの出現回数を算出した上で、その平均値を求め、比較を行う。求めた平均値は、算出した値の小数第3位で四捨五入し、小数第2位までを表記することとする。以下、同様に算出する。

まず、観察回毎の各スキルの出現について捉える。表5は男児Tを、表6は女児Rを含むグループの各スキルの出現回数の平均値を示したものである。

男児Tを含むグループの各観察回における各スキルの出現回数の平均値をみると（表5）、すべての遊びにおいて最も多く表出されたスキルは「A30」である。次いで「B10」、「B20」の順に多く表出されている。しかし、5回目

と8回目の観察においてのみ、5回目では「B10」が4.86回/h、「B20」が9.71回/h、8回目では「B10」が22.59回/h、「B20」が23.10回/hであり、「B20」が「B10」よりも多く表出されている。一方、最も表出が少ないスキルは観察回によって異なるものの、「C20」が全体を通して最も平均出現回数が少ない。

次に、女兒Rを含むグループ

の各観察回における各スキルの出現回数の平均値をみると(表6)、すべての遊びにおいて、最も多く表出されたスキルは「A30」である。次いで「B10」、「B20」の順に多く表出されている。6回目の観察においてのみ、「B20」が「B10」よりも多く表出されている。最も表出が少ないスキルは、観察回によって異なるものの「A11」「C20」「C30」が全体を通して平均出現回数が少ない。

これらの結果について考察すると、「A30」が最も多く表出される理由として、「A30」は「自分の考え・思いの主張を表す発話・行為」であり、遊びの中で自分の考えや思いを伝えることは遊びを展開させるために重要な役割を担っており、「ごっこ遊び」を展開させるために重要な役割を果たしていると考えられる。一方、「A12」「A20」は、遊びを提案したり、遊びに誘ったりするスキルであるため、このスキルが多用されると、遊びの内容が定まらずに遊びが継続し難い状況になることが推測される。また、「A40」は相手の主張に対して無視をすることにより、自分の「やりたくない、反対である」という気持ちを表現するスキルであることから、「A40」の表出が増加すると遊び仲間とのコミュニケーションが円滑に進まず、遊びを成り立たせることが困難になることが予想される。このことから、遊びを共有するグループ内において「A30」の表出が多いと考えられる。また、「B10」「B20」の順に多く表出されている理由として、集団の「ごっこ遊び」を成立させるには、相手の意見を取り入れたうえでさらにストーリーを展開させていくことが重要であることが考えられる。「ごっこ遊び」においては、「自分の考え・思いの主張を表す発話・行為」である「A30」に対して、協調を示す「B10」「B20」が多く表出されることで、円滑に展開することが推測される。さらに「B20」が「B10」よりも多く観察されたのは、2グループ合わせて20回観察されたうち3回(男児2回、女兒1回)のみである。「B10」は「友達の主張・提案を受け入れる発話・行為」であり、「B20」は「友達の主張・提案を受け入れ、ごっこ遊びのルールに従って遊ぶ発話・行為」である。つまり「B10」が多く表出されている遊びは、自分の気持ちや思いを表出せずに相手の意見を受け入れることで遊びを展開している。その一方で、「B20」が多く表出されている遊びは、相手の主張を受け入れた上で、「ごっこ遊び」のルールを踏まえて対応し、遊びを展開させることができているといえる。このことから、男児T及び女兒Rを含むグループにおいては、誰かの「自分の考え・思いの主張を表す発話・行為」に対して、それを受け入れて遊びが展開することが多いものの、時には「友達の主張・提案を受け入れ、『ごっこ遊び』のルールに従って遊ぶ発話・行為」を交えつつ、「ごっこ遊び」が展開していることが推察される。

次に、10回の観察回において、幼児の表出するスキルがどのように変化しているのかをみるために、社会的スキルの下位カテゴリー毎にその出現数の1時間あたりの平均値を求め、観察回間の分散分析を行う。

まず、男児Tを含むグループについて分散分析を行った結果を示す。観察回間で有意差がみられたのは「B10」($F(9,60)=4.561, p<0.01$)、「B20」($F(9,60)=2.325, p<0.05$)であり、「A30」には有意な傾向がみられる($F(9,60)=1.743, p<0.10$)。そこで、有意差及び有意な傾向が認められる「A30」「B10」「B20」について、各回

表5 1時間あたりの各スキル出現回数の平均値(男児Tを含むグループ) n/1h

観察回		A11	A12	A20	A30	A40	B10	B20	C10	C20	C30
term1	1	2.07	.89	1.78	35.60	1.19	25.49	13.64	.59	.30	1.48
	2	.48	.00	.96	98.33	.48	62.66	19.76	4.34	.96	.48
	3	1.42	.71	3.90	62.82	.71	50.75	12.78	1.42	.35	1.06
	4	.68	1.02	.00	42.63	1.36	8.87	5.80	.34	.00	1.71
	5	.00	.57	.00	15.14	.57	4.86	9.71	.86	.00	1.14
term2	6	.00	.59	1.48	26.31	.89	10.64	9.46	1.18	.00	.59
	7	1.43	1.43	.29	18.86	1.14	7.43	3.14	1.14	.29	.29
	8	.41	1.27	.00	57.60	2.04	22.59	23.10	2.45	1.22	2.04
	9	1.71	.00	5.14	52.72	6.86	13.83	7.29	1.71	.00	.00
	10	.49	.00	.49	26.60	.99	20.69	6.90	.99	.00	2.96

表6 1時間あたりの各スキル出現回数の平均値(女兒Rを含むグループ) n/1h

観察回		A11	A12	A20	A30	A40	B10	B20	C10	C20	C30
term1	1	.23	.00	.00	11.56	.30	6.85	5.78	.23	.00	.67
	2	.53	2.18	.40	42.91	.93	31.78	5.35	.81	.81	2.02
	3	.00	.24	.22	12.89	.65	4.92	2.03	.43	.48	.22
	4	.51	1.52	.51	33.49	.00	17.76	11.67	1.01	.00	.00
	5	.70	1.98	1.39	20.55	.35	19.62	5.34	.70	.00	.00
term2	6	.00	.54	.90	36.18	.00	6.36	10.00	1.27	.18	.55
	7	.70	.00	.35	17.60	.00	15.84	2.11	.00	.00	.00
	8	.00	.00	.00	35.21	2.82	13.15	11.88	2.09	.00	.00
	9	.00	.00	1.37	21.48	.00	8.03	4.79	.00	.68	.00
	10	.00	.00	.00	20.41	.00	8.73	1.48	.42	.00	.00

の平均出現回数の差を捉えるために、多重比較による下位検定を行う。

表7は、「A30」の各回の平均出現回数の多重比較のうち、有意差がみられる回について示したものである。その結果、2回目>1回目、4回目、5回目、6回目、7回目、10回目において有意な差がみられ、2回目>9回目、3回目>5回目については有意な傾向がみられる。このことから男児Tを含むグループでは、2回目及び3回目の遊びに多くの「A30」が表出されており、これらの回の遊びでは、自分の思いや考えを主張する発話・行為が多く行われていたといえる。

次に、表8は「B10」の各回の平均出現回数の多重比較のうち、有意差がみられる回について示したものである。

その結果、2回目>1回目、4回目、5回目、6回目、7回目、8回目、9回目、10回目、3回目>4回目、5回目、6回目、7回目、8回目、9回目、10回目において有意な差がみられ、3回目>1回目において有意な傾向がみられる。このことから男児Tを含むグループでは、2回目、3回目の遊びに多くの「B10」が表出されており、これらの回の遊びでは、友達の主張・提案を受け入れる発話・行為が多く行われていたといえる。

表7 男児Tを含むグループ 「A30」多重比較

観察回		観察回	有意確率
1回目(35.60)	<	2回目(98.33)	.024*
2回目(98.33)	>	4回目(42.63)	.043*
	>	5回目(15.14)	.003**
	>	6回目(26.31)	.010*
	>	7回目(18.86)	.005**
	>	9回目(52.72)	.096†
3回目(62.82)	>	10回目(26.60)	.010*
	>	5回目(15.14)	.082†

† : p<.10 * : p<.05 ** : p<.01

表8 男児Tを含むグループ 「B10」多重比較

観察回		観察回	有意確率	観察回		観察回	有意確率
1回目(25.49)	<	2回目(62.66)	.005*	3回目(50.75)	>	4回目(8.87)	.002**
	<	3回目(50.75)	.053†		>	5回目(4.86)	.001**
2回目(62.66)	>	4回目(8.87)	.000**		>	6回目(10.64)	.003**
	>	5回目(4.86)	.000**		>	7回目(7.43)	.001**
	>	6回目(10.64)	.000**		>	8回目(22.59)	.032*
	>	7回目(7.43)	.000**		>	9回目(13.83)	.005**
	>	8回目(22.59)	.003**		>	10回目(20.69)	.022*
	>	9回目(13.83)	.000**				
	>	10回目(20.69)	.002**				

† : p<.10 * : p<.05 ** : p<.01

さらに表9は、「B20」の各回の平均出現回数の多重比較のうち、有意差がみられる回について示したものである。その結果、2回目>4回目、7回目、9回目、10回目、8回目>4回目、5回目、6回目、7回目、9回目、10回目に有意な差が、1回目>7回目、2回目>5回目、6回目、8回目>3回目において有意な傾向がみられる。このことから男児Tを含むグループでは、1回目、2回目、8回目の遊びに多くの「B20」が表出されており、これらの回の遊びでは、友達の主張・提案を受け入れ、「ごっこ遊び」のルールに従って遊ぶ発話・行為が最も多く行われていたといえる。

「A30」「B10」「B20」のうち、「A30」「B10」はterm1において有意に多く表出されており、「B20」はterm1のみならず、term2である8回目においても有意に多く表出されており、表5をみると8回目において最も平均出現回数が多い。「B20」は、友達の主張・提案を受け入れ、「ごっこ遊び」のルールに従って遊ぶ発話・行為であることから、男児Tを含むグループでは観察回前半(term1)よりも後半(term2)において、単に相手の意見に協調するのみならず、「ごっこ遊び」のルールに従って応答する遊びの展開が増加することが示唆される。

表9 男児Tを含むグループ 「B20」多重比較

観察回		観察回	有意確率	観察回		観察回	有意確率
1回目(13.64)	>	7回目(3.14)	.077†	8回目(23.10)	>	3回目(12.78)	.082†
2回目(19.76)	>	4回目(5.80)	.020*		>	4回目(5.80)	.004**
	>	5回目(9.71)	.090†		>	5回目(9.71)	.025*
	>	6回目(9.46)	.083†		>	6回目(9.46)	.023*
	>	7回目(3.14)	.006**		>	7回目(3.14)	.001**
	>	9回目(7.29)	.037*		>	9回目(7.29)	.009**
	>	10回目(6.90)	.031*		>	10回目(6.90)	.007**

† : p<.10 * : p<.05 ** : p<.01

次に、女兒Rを含むグループについて分散分析を行った結果を示す。観察回間で有意差がみられたのは「A40」(F(9,100)=2.148, $p<0.05$), 「C30」(F(9,100)=2.156, $p<0.05$)であり, 「B10」には有意な傾向がみられる(F(9,100)=1.932, $p<0.10$)。次に, 有意差及び有意な傾向が認められる「A40」「B10」「C30」について, 各回の平均出現回数の差を捉えるために, 多重比較による下位検定を行う。

表10は, 「A40」の各回の平均出現回数の多重比較のうち, 有意差がみられる回について示したものである。その結果, 8回目はすべての回に対して有意な差がみられる。このことから女兒Rを含むグループでは, 8回目の遊びに多くの「A40」が表出されており, 相手の主張は聞こえているが, 嫌だ, やりたくないという気持ちを「無視」することで表現するスキルが多く用いられていたといえる。

次に, 表11は「B10」の各回の平均出現回数の多重比較のうち, 有意差がみられる回について示したものである。その結果, 2回目>1回目, 3回目, 6回目, 7回目, 8回目, 9回目, 10回目において有意な差がみられ, 2回目>4回目, 5回目>3回目において有意な傾向がみられる。このことから女兒Rを含むグループでは, 2回目, 5回目の遊びに多くの「B10」が表出され, これらの回の遊びでは, 友達の主張・提案を受け入れる発話・行為が多く行われていたといえる。

さらに表12は, 「C30」の各回の平均出現回数の多重比較のうち, 有意差がみられる回について示したものである。その結果, 2回目はすべての回に対して有意な差がみられる。このことから女兒Rを含むグループでは, 2回目の遊びに多くの「C30」が表出されており, この回の遊びでは, 仲間とのいざこざ場面で自分の考えに折り合いをつけ, 気持ちをコントロールできる発話・行為が最も多く行われていたといえる。

「A40」「B10」「C30」のうち, 「A40」はterm2において有意に多く表出されており, 「B10」「C30」はterm1において有意に多く表出されている。「B10」は「友達の主張・提案を受け入れる発話・行為」であり, 「C30」は「仲間とのいざこざ場面で自分の考えに折り合いをつけ, 気持ちをコントロールできる」スキルであることから, 観察前半(term1)においては相手を受け入れたり, 折り合いをつけながら, 円滑な遊びの展開をするものの, 後半(term2)においては「相手の主張は聞こえているが, 嫌だ, やりたくないという気持ちを『無視』することで表現するスキル(A40)」のような巧みな意志表現を遊びの中に表出させ, 遊びを展開していることが考えられる。

男児T及び女兒Rを含むグループの遊びに表出される社会的スキルをみると, 観察前半(term1)においては「自分の考え・思いの主張を表す発話・行為(A30)」「友達の主張・提案を受け入れる発話・行為(B10)」「仲間とのいざこざ場面で自分の考えに折り合いをつけ, 気持ちをコントロールできる(C30)」の表出が多い観察回がある一方で, 観察後半(term2)では「相手の主張は聞こえているが, 嫌だ, やりたくないという気持ちを『無視』することで表現するスキル(A40)」「友達の主張・提案を受け入れ, ごっこ遊びのルールに従って遊ぶ発話・行為(B20)」の表出が多い回がみられる。これは, 年中児になって2か月ほど経過した子どもたちが「ごっこ遊び」をする際には, 「考えや思いの主張」とそれに対する受容や折り合いといったやりとりが多くみられること, それを経て様々な経験を重ねていく秋頃になると, 相手の主張を受け入れた上で「ごっこ遊び」のルールに従って遊びを展開したり, 相手の主張を「無視」することで受け入れない, という表現をごっこ遊びの展開にもちいるようになることを

表10 女兒Rを含むグループ 「A40」多重比較

観察回		観察回	有意確率
8回目(2.82)	>	1回目(.30)	.004**
	>	2回目(.93)	.028*
	>	3回目(.65)	.012*
	>	4回目(.00)	.001**
	>	5回目(.35)	.004**
	>	6回目(.00)	.001**
	>	7回目(.00)	.001**
	>	9回目(.00)	.001**
	>	10回目(.00)	.001**

† : $p<0.10$ * : $p<0.05$ ** : $p<0.01$

表11 女兒Rを含むグループ 「B10」多重比較

観察回		観察回	有意確率
1回目(6.85)	<	2回目(31.78)	.004**
2回目(31.78)	>	3回目(4.92)	.002**
	>	4回目(17.76)	.099†
	>	6回目(6.36)	.003**
	>	7回目(15.84)	.061*
	>	8回目(13.15)	.029*
	>	9回目(8.03)	.006**
	>	10回目(8.73)	.007**
3回目(4.92)	<	5回目(19.62)	.084†

† : $p<0.10$ * : $p<0.05$ ** : $p<0.01$

表12 女兒Rを含むグループ 「C30」多重比較

観察回		観察回	有意確率
1回目(.67)	<	2回目(2.02)	.030*
2回目(2.02)	>	3回目(.22)	.004**
	>	4回目(.00)	.001**
	>	5回目(.00)	.001**
	>	6回目(.55)	.019*
	>	7回目(.00)	.001**
	>	8回目(.00)	.001**
	>	9回目(.00)	.001**
	>	10回目(.00)	.001**

† : $p<0.10$ * : $p<0.05$ ** : $p<0.01$

意味している。このように誰かが思いを表出し、それを受け入れるという、ある意味では従順な遊びのやりとりから、誰かの思いを受け止めつつ、遊びのルールや枠組みを理解し、それに沿って遊んだり、相手の思いを「無視」することで拒否するような複雑で巧みなやりとりを年中児ができるようになっていくことが示唆される。

4. おわりに

本研究は、4 歳児のごっこ遊びの観察を通して、幼児が表出する社会的スキルの特徴とその変化を捉えることを目的とし、対象児のうち特に社会的スキルが高いと担任保育者に評価された男児 T と女児 R を含むグループの「ごっこ遊び」場面を観察し、そこに表出された社会的スキルの様相について分析を行った。その結果、観察された10回すべての「ごっこ遊び」場面において「A主張スキル」と「B協調スキル」の表出が多く、観察前半よりも後半において、「A主張スキル」の表出割合が「B協調スキル」に比して多くなることが示された。また、社会的スキルの下位カテゴリーの分析から、他者の遊びへの提案や主張に対し、それを受け入れて遊びを展開したり、時には受け入れるだけでなく、それを「ごっこ遊び」の枠組みの中で適切に対応する社会的スキルが多く表出されていた。さらに観察前半と後半の比較により、「考えや思いの主張」とそれに対する受容や折り合いといったやりとりが多用されるごっこ遊びから、相手の主張をごっこのルールに従って受け入れたり、ある時は相手の主張を「無視」することで受け入れられないという自己表現が遊びの中で表出されるようになることが推察された。

以上の結果から、幼児の「ごっこ遊び」は主に「主張」と「協調」のやりとりによって構成されていることが明らかとなった。また、発達に伴い、幼児の社会的スキルは一方の主張を他方が受容するといったシンプルなものから、「ごっこ遊び」の枠組みの中での適切な協調を提示したり、ときには相手の主張に対する拒否を無視することで示したりする等、複雑で巧妙なスキルを表出することが可能となることが示唆された。

しかし、本研究は対象児数が限られること、また観察の時期や回数についても制限があることから、「ごっこ遊び」における幼児の社会的スキルの変化を断片的に捉えるにとどまった。今後は多様な子どもたちの姿と発達の様相を捉えるために、対象児数を増やし、量的なデータを収集するとともに、幼児一人ひとりの発達の過程を捉えられるような質的データの分析も必要であると考えられる。

付記

なお、本研究の一部は、平成30年度上越教育大学卒業研究（林千恵）において、発表されている。
本研究にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 相川充 2000 人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－ サイエンス社
- (2) 高橋雄介 岡田謙介 星野崇宏 安梅勅江 2008 就学前児の社会的スキル－コホート研究による因子構造の安定性と予測的妥当性の検討－ 教育心理学研究 56 81-92
- (3) Gresham, F. M. and Elleatt, S. N. (1987) The relationship between adaptive behavior and social skill ; issues in definition and assessment. The Journal of Special Education, 21(1), 167-181.
- (4) 野本浩太郎 石野陽子 2015 小学校高学年児童における遊び能力と社会的スキルの心理学的研究 教育臨床総合研究 14 75-88
- (5) 渡辺広人 佐藤公代 2005 児童の遊びに関する研究－社会的スキル、向社会的行動、肯定感との関連について 愛媛大学教育学部紀要 52巻 1号 61-78
- (6) 須藤敏明 1991 現代っ子の遊びと生活 青木書店 59-67
- (7) 高橋たまき 1989 『想像と現実－子供のふり遊びの世界－』 ブレーン出版
- (8) エリコニン 1960 『児童心理学』 駒林邦雄訳 1964 『ソビエト・児童心理学－幼年期教育の基礎－』 明治図書
- (9) 大内晶子 櫻井茂男 2008 幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討 教育心理学研究 56巻 3号 376-388
- (10) 神谷友里 吉川はる奈 2011 幼児の役割遊びにおける役割取得の特徴に関する研究－5 歳児のごっこ遊びの成立過程－ 埼玉大学紀要 教育学部 60巻 2号 19-28
- (11) 厚生労働省(2008) 『保育所保育指針』
- (12) 金山元春 金山佐喜子 磯部美良 岡村寿代 佐藤正二 佐藤容子 2011 幼児用社会的スキル尺度（保育者評定版）の開発 カウンセリング研究 44巻 3号 116-226

The Aspects of Social Skills in Four-Year-Olds' Pretend Play

Chisato HAYASHI* · Chinatsu YOSHIZAWA**

ABSTRACT

This study aimed to clarify aspects of young children's social skills by observing their playful play. Nineteen young children were observed pretending to play in free situations, and the social skills demonstrated during the play were analyzed. The results are as follows.

1. "Assertiveness skill" and "Cooperation skill" were more frequently seen in all of the observed sessions, while "Self-control skill" was less common.

2. The most frequently expressed social skill was "Assertiveness skill" which was followed by "Cooperation skill" On the other hand, "self-control skills" were the least frequently mentioned. In the first half of the observation sessions, there was little difference between the proportions of "assertive skills" and "cooperative skills," but in the second half, the proportion of "assertive skills" was higher than that of "cooperative skills."

3. There were many expressions in the subcategory of social skills "utterances and actions that express assertions of one's own thoughts and feelings," "utterances and actions that accept friends' assertions and suggestions," and "utterances and actions that accept friends' assertions and suggestions while adhering to pretend play rules."

4. During the first half of the observation (term 1), children showed many examples of "speech and action to express one's own thoughts and feelings" "speech and action to accept friends' arguments and suggestions" and "the ability to come to terms with one's own thoughts and control feelings in conflict situations with peers" However, in the latter half of the observation (term 2), they expressed predominantly "the skill of expressing feelings of disagreement or unwillingness by ignoring the other's proposals," acceptance of arguments and suggestions from friends, and speech and actions following pretend play rules. It was suggested that as children grow older, their social skills in pretend play become more complex and skillful.